

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21956

研究課題名（和文）契丹語と遼代漢語の双方向的研究

研究課題名（英文）Bidirectional Approach to Khitan and Liao Chinese

研究代表者

大竹 昌巳（Otake, Masami）

京都大学・文学研究科・講師

研究者番号：60884369

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、10～12世紀に遼朝（契丹国）内で使用された契丹語と遼代漢語という密接不可分な2つの言語の音韻体系をより正確に理解するために、契丹語文献中の漢語表記と漢字文献中の契丹語表記の分析を行ない、遼代漢語の声調体系と契丹語の音調的特徴を明らかにした。それとともに、契丹語彙を記録した漢字文献の流伝に関わる諸問題を検討し、文献学的に興味深い新たな知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって従来十分に理解されていなかった遼代漢語の音韻体系の本格的な解明が進んだことは、この言語が現在の北京を含む地域で話されていたことを考慮するなら、現代の北京方言や標準中国語の発展過程を理解する上で非常に重要な成果となる。また、契丹文字資料のみからでは明らかにできない契丹語の音調を対音資料を用いて明らかにしたことは、「直接音声を聞くことのできない歴史上の言語の音韻を文字資料からいかにして復元するか」という困難な問題に対するひとつの解決方法を示した興味深いモデルケースであると言える。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I have examined the phonology of the two deeply related languages that were used in the Khitan Empire (Liao Dynasty) between the 10th and 12th centuries: Khitan and Liao-Chinese. By analyzing transcriptions of Chinese words in Khitan materials and of Khitan words in Chinese materials, I have revealed the tone system in Liao-Chinese and intonational features in Khitan. Moreover, I have studied the issues related to the circulation of a Chinese book that recorded Khitan words and obtained new findings about it that is of philological importance.

研究分野：言語学

キーワード：遼代漢語 契丹語 契丹文字 契丹小字 対音資料 声調

## 1. 研究開始当初の背景

契丹語は、10-12世紀に中国北部を含むユーラシア東方の広大な地域に遼朝(契丹国)を建国したモンゴル系遊牧民族である契丹人の言語であり、彼らが創製した契丹文字(契丹大字と契丹小字)によって書き残されたが、近年この文字資料が陸続と出土したことでその解読が大きく進展している。

一方、漢語(中国語)は古代から現代に至るまで絶えずユーラシア東方で大きな影響力を保持してきたシナ・チベット語族の大言語であり、歴史上豊富な資料を残してきた。遼朝内における漢人居住地の最重要地区である幽燕地域は現在の北京を中心とする地域であり、以降の歴代王朝・国家の首都がここに置かれたことを考慮に入れるとき、その源流としての遼朝の漢語変種(以下、遼代漢語)には漢語史上重要な意義がある。ところが、遼代漢語については、その音韻体系を知るための有力な資料がこれまで存在しなかった。契丹語資料の出現と解読は、この状況を打破するものである。なぜならば、遼朝が契丹語と漢語を主要言語とする多言語国家であったことを反映して、契丹文字資料には数多くの漢語語彙が含まれ、また遼代の漢文資料にも多くの契丹語語彙が含まれるため、これら対音資料が遼代漢語音推定の重要な手がかりとなるからである。

しかしながら、契丹語・契丹文字の解読は従来、まさに上記の理由から漢語音を最も重要な音価推定の手がかりとして行なわれてきた。この漢語音は異なる時代・地域の漢語音を代用したものにすぎず、それゆえそのような根拠によって推定されてきた契丹語音には正確でない部分が含まれる。つまり、契丹語の音韻体系(延いては言語体系全体)をより正確に理解するためには遼代漢語音を正確に理解しなければならず、一方で遼代漢語音を正確に理解するためにも契丹語音を正確に理解しなければならない、という相互依存関係が存在するのである。

遼代漢語音については、一部の音韻的特徴を取り上げて論じた研究は過去にも存在するが(例えば沈 2006)、その基礎となる契丹文字の推定音価に問題がある場合があり、妥当な結論が導かれているとは言いがたい。近年、筆者は博士論文(大竹 2020)第5章において遼代漢語音を総合的に論じ、声母・韻母・声調の各体系についてこれまでの知見を大きく書き換える成果を挙げたが、特に声調についてはその議論に不十分な部分もあり、依然として究明すべき事柄が残されていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、契丹語と遼代漢語という密接不可分な関係にある両言語の文献言語学的研究を同時並行的に進めることで、一方の分野での成果をもう一方の分野での成果へと双方向的に還元し、両分野の研究の進展に寄与することを目指したものであった。遼代漢語の音韻体系を具体的に解明することは、北方漢語の発展過程を理解する上で重要な意味をもつ作業であり、契丹語の音韻体系を解明することも、モンゴル系諸言語と契丹語との関係を正しく理解する上で不可欠の作業である。

## 3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するために、第一に研究対象のデータとなる契丹文字文献中の漢語語彙と漢字文献中の契丹語語彙を収集・整理するとともに、そうした語彙を記録する文献やそこに記載される語彙の由来について疑問がある場合にはそれを追究した。第二に、収集・整理したデータに基づき文字表記と音韻との相関関係を分析し、遼代漢語・契丹語それぞれの音声・音韻の特徴や体系を明らかにしようとした。第三に、以上の成果を応用して契丹文字文献の読解を行なった。

## 4. 研究成果

本研究で得られた成果(発表済みのもの)について、成果の重要性および中心課題との関連性に基づき、優先度の高いものから順に説明する。

### (1) 遼代漢語の声調と契丹語音との関連について

契丹小字文献中の漢語の表記において、一般に声調は書き分けられないことがないが、随意的な特殊表記として字素を余分に書き加える方式(以下、余剰表記)が存在し、これが漢語の去声音節を表わすための特殊表記であることが先行研究で主張されている(沈 2012)。しかし筆者は、余剰表記が去声音節(全濁上声・次濁入声音節を含む)のみならず陽平声音節(全濁入声音節を含む)にも意図的に使用されていることを認めた上で、両者には余剰表記の使用比率に差があることを明らかにし、それによって両者が遼代漢語において合流して同じ1つの調類になっていたわけではなく、やはり調類としては別のカテゴリーを成していたことを結論づけた。余剰表記の意図については、当該音節の持続時間の長さを示すもので、その長さは遼代漢語の去声(および陽平声)が曲折調であることに起因すると考えているが、これは文献記述および一般音声学の特徴によって根拠づけられる。

また、契丹小字文献中の漢語表記には別の特殊表記（中断表記）も存在し、これが漢語の陽調（低レジスター）音節を表わすための表記であることを、表記がもたらす視覚的効果や同系言語である現代モンゴル語の音調を根拠に推定した。

さらに、遼代漢語石刻文献中の契丹語音写表記を分析し、まず去声字が契丹語の重音節の表記に使用される頻度が明らかに高く、上述の結論を裏づけることを確認した。また、声調ごとの位置による使用頻度に明確な差があり、陽調字が語頭で、陰調字が語末で使用される傾向があることから契丹語の語音調が低く始まり高く終わるものであったこと、入声字の分布から遼代漢語では入声为非語末で短促調を保持し、語末では舒声に合流していたことなどを明らかにした。

以上の成果は、大竹（2020）で一部すでに指摘していた点もあるが、統計的データ等も加えてさらに分析を大きく進めたもので、京都大学言語学懇話会第113回例会（2020年12月）での口頭発表「遼代漢語の声調と契丹語の音韻」として発表した。この研究は遼代漢語の調類・調値を明らかにし、さらに契丹語の音調的特徴をも明らかにしたもので、対音資料を用いた歴史言語学的研究として重要な成果であり、研究期間中の論文投稿は間に合わなかったが、近く論文として発表する予定である。

#### (2) 遼代漢語の声母・韻母と契丹語音との対応に関する年代差について

契丹文字は契丹大字・契丹小字とも10世紀前半に創製されたものであるが、特に契丹小字については現存の出土文献は11世紀後半から12世紀後半の期間に製作されたもので、契丹大字文献もほとんどがその期間に製作されたものである。一方、契丹語の音訳語彙を含む現存の漢字石刻文献の製作年代は10世紀前半から12世紀までと幅広い。ここで、筆者は10世紀前半（遼代前期）と11世紀以降（遼代中後期）とでは遼代漢語と契丹語との音韻の対応関係に体系的な差異が存在することを明らかにした。語頭の声母（頭子音）に関して言えば、遼代前期は契丹語の強阻害音（p, t, ɕ, k等）に対して漢語の全清音・次清音・全濁音が対応し、契丹語の弱阻害音（b, d, j, g等）に対しては漢語の次濁音が対応する傾向が強い。一方、遼代中後期では契丹語の強阻害音に対して漢語の次清音と平声全濁音が対応し、契丹語の弱阻害音に対しては漢語の全清音と仄声全濁音が対応して、漢語の次濁音は契丹語の鼻音（m, n, ŋ）としか対応しない。このことは、主として遼代漢語の側に、前期と中後期とで音韻体系の大きな変化があったことを示唆する。前期の体系は唐代長安音に類似し、中後期の体系は元代北京音に類似する。

以上の知見は『学会通信 漢字之窗』第3巻第2号所収の短文「漢字・漢語と契丹文字研究」の中で言及した。

#### (3) 契丹語音訳語彙を含む漢字文献について

契丹語音訳語彙を含む伝世文献はわずかししか現存しないが、そうした資料の中でも多くの音訳語彙を含んでいて貴重なのが、遼朝から北宋へと亡命した武珪が情報提供者となって著述された『燕北雜記』である。ただし、この書はいくつかの書籍に佚文が残るのみで現存しない。筆者は以前よりこの書を対象に研究を行ってきたが、本研究期間中には第21回遼金西夏史研究会大会（2021年3月）において「『遼史』歳時雜記の成立過程」と題する口頭発表を行なった。この発表は武珪『燕北雜記』佚文の流伝過程を調査した結果を報告するもので、もともとその前年（本研究課題の開始前）に行なわれる予定であったが、新型コロナウイルス蔓延の影響を受けて延期となっていたものである。本研究期間中にさらに関連調査を進めたところ、武珪『燕北雜記』佚文を引用する歴史書『契丹国志』の作者とされる南宋の葉隆礼に関わる資料を数点発見するなど新知見が得られたため、上記発表に組み込んだ。発表においては武珪『燕北雜記』佚文に由来する『遼史』歳時雜記での音訳漢字の書き換えについても言及し、その書き換えが契丹語を理解しない人物によって行なわれたことを推定した。

#### (4) 契丹文字文献の読解成果について

契丹語の音韻体系を正確に理解することは、契丹語の形態音韻規則を正確に理解することにつながり、それによって契丹語文法の理解が促進され、契丹語文の正確な読解も可能となる。本研究期間中には契丹文字墓誌資料の読解も並行して進めたが、『故耶律氏銘石』と通称される墓誌と『耶律仁先墓誌銘』の2点の契丹小字墓誌の読解が主たる成果として挙げられる。前者は契丹文字研究会の定例会で読解成果を報告している途中であり、後者は『岩波講座 世界歴史 第7巻：東アジアの展開 8～14世紀』（岩波書店、2022年）のコラムとして執筆した「契丹文字墓誌が語るもの」の中でいくつかの興味深い解読事例を紹介した。

#### <引用文献>

大竹昌巳（2020）『契丹語の歴史言語学的研究』京都大学博士学位請求論文

沈鍾偉（2006）「遼代北方漢語方言的語音特徴」『中國語文』2006年第6期，483-498頁

沈鍾偉（2012）「契丹小字漢語音譯中の一箇聲調現象」『民族語文』2012年第1期，39-50頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大竹昌巳	4. 巻 3(2)
2. 論文標題 漢字・漢語と契丹文字研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学会通信 漢字之窗	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註（3）
3. 学会等名 第4回契丹文字研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註（4）
3. 学会等名 第5回契丹文字研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註（5）
3. 学会等名 第6回契丹文字研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註(6)
3. 学会等名 第7回契丹文字研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註(7)
3. 学会等名 第8回契丹文字研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 遼代漢語の声調と契丹語の音韻
3. 学会等名 京都大学言語学懇話会第113回例会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 契丹語文献を読むために
3. 学会等名 第1回契丹文字研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註(1)
3. 学会等名 第2回契丹文字研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 日本における近年の契丹文字研究：回顧と展望
3. 学会等名 公開ワークショップ「契丹文字研究の現在(2021)」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『遼史』歳時雜儀の成立過程
3. 学会等名 第21回遼金西夏史研究会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹昌巳
2. 発表標題 『故耶律氏銘石』訳註(2)
3. 学会等名 第3回契丹文字研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 荒川正晴, 富谷至, 宮澤知之, 丸橋充拓, 舩田善之, 井黒忍, 伊藤正彦, 金文京, 山崎覚士, 徳永洋介, 渡辺健哉, 川村康, 佐々木愛, 矢木毅, 大竹昌巳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 306
3. 書名 東アジアの展開 8～14世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------